テレビ部門

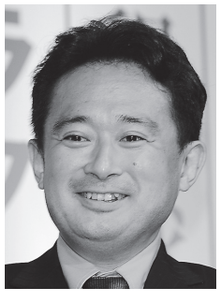
大賞は、自由闊達な精神にあふれ、東日本大震災後の日本に明るい光を投げかけた「あまちゃん」（日本放送協会）に贈られた。客席にいたスタッフが次々にステージに集まり、予期していなかった受賞に顔をほころばせた。
優秀賞には、政治からの有形無形の圧力や、視聴者からの厳しい視線、自己規制などによって、テレビの表現の幅が委縮していくことが懸念されるなか、思い切って表現している作品が選ばれた。

●テレビ部門・大賞

連続テレビ小説「あまちゃん」

思わぬ受賞に「ほんとやばい、まじか?」と、驚きを隠せない演出の井上剛さん。「こんな遊び半分みたいな恰好で来ちゃってすみません」とペコリ。

演出の吉田照幸さんは、普段は「サラリーマンNEO」を担当。「朝ドラ、やらない?」と「コント島からドラマ大陸に招聘され」、初ドラマで大賞を受賞。



「視聴者がどんどん発信して楽しんでくれて、その熱が作り手の我々にも伝わり、相乗効果が生まれた」と制作統括の菓子浩さん。

「こんなことなら能年玲奈さんを呼んでおくべきだった……」と訓覇圭チーフ・プロデューサー。宮藤官九郎さんの脚本を讃えた。

●テレビ部門・優秀賞

**「ニッポンの性教育
セックスをどこまで教えるか」**

性教育をタブー視することに立ち向かい、その必要性を正面から訴えた中京テレビの作品。ナレーションを務めた女優の毬谷友子さんは発表を聞いて瞳を輝かせ、「ここまで踏み込んでいいのかと思うような台本をいただいた。どうしても伝えたいと、スタッフが退社を覚悟で作っている気概を感じ、私もがんばった」と熱い想いを語った。

「報道特集 シリーズ秘密保護法案」

強行採決された秘密保護法案について、何度も特集を組み、私たちの日常生活にどう関わってくるのか、くり返し問題点を伝えた。「非常に大事なものだと思い、秘密保護法がどんな法律なのか、わかりやすく伝えようとした。難しくて最後まで苦心した」とTBSの遊佐勝美チーフディレクター。

テレビ朝日開局55周年記念 山田太ードラマスペシャル
「時は立ちどまらない」

被災した家族、しなかった家族の心の葛藤という難しいテーマに挑んだテレビ朝日の内山聖子ゼネラルプロデューサーは、山田太一さんから「フィクションで」という話があったとき最初は躊躇したこと、「ドキュメンタリーや報道では立ち入れない分野があり、そこに脚本が切り込んでいく」と山田さんに言われたことなどを話した。

51st GALAXY AWARD

ギャラクシー賞贈賞式

6月4日、ギャラクシー賞の第51回贈賞式がウェスティンホテル東京で開催された。出席した関係者は約700名。参加作品は合わせて約650本。贈賞式では、CM部門、ラジオ部門、報道活動部門、テレビ部門の順に、それぞれノミネートされた作品がステージで表彰され、さらに［優秀賞］［大賞］作品が発表、トロフィ「バードマン」が贈られた。そのほか、テレビ部門の［マイベストTV賞］［個人賞］［特別賞］、ラジオ部門の［DJパーソナリティ賞］、そして［志賀信夫賞］も発表。放送関連の賞として「国内で最高」とも言われるギャラクシー賞の栄誉に浴した。（各賞の詳細は7月号を参照）

ラジオ部門

●ラジオ部門・大賞

TOKYO FM特別番組
「これからを見つめて～LOVE&HOPE 3年目の春だより～」

東日本大震災から3年になる今年は、ドキュメンタリーだけではなく、ドラマや音楽エンタテインメントで震災を伝えようとする番組が目立った。大賞の「LOVE&HOPE 3年目の春だより～」（エフエム東京）は、震災直後に始まり、現在も毎日放送されている番組の集大成。被災地の放送局と協力し、現地の声に耳を傾け続けている。「継続と想像力が未来への選択とつながり、希望を感じさせてくれた」と評された。

「望外の賞」と喜びをかみしめる延江浩ゼネラルプロデューサー。「まだまだこれから。みなさんと手を携えて被災地の現状を浮き彫りにし、みんなで解決していきたい」。

パーソナリティを務めたロバート・キャンベルさんは大賞にびっくり。「現地の方と一緒に伝えることができてうれしかった。放送しながら途中で詰まって、なかなか伝えられなかったことを思い出した」。

●ラジオ部門・優秀賞

「赤江珠緒　たまむすび」

赤江珠緒のとぼけた味とピエール瀧のつっこみが絶妙の午後のワイド番組（TBSラジオ＆コミュニケーションズ）。部活の掛け声を集めた企画では、リスナーと一緒に番組を作り上げた。バードマンを手にした赤江さんは、「リスナーさんが電話で参加してくれて、部活の掛け声を次々につないでくださったのがすべて。リスナーさんが取った賞」。

「途切れた119番～祐映さんと救急の6分20秒～」

通報を無視されて遺体で見つかった大学生と消防署員との音声記録から、救急要請を巡る構造的な問題に迫るノンフィクション。山形放送報道制作局報道部の新野陽祐ディレクターは、「遺族の方が情報公開請求で取り寄せた音声記録を聞き、おかしいと思って取材をスタートした。多くのみなさんに聞いていただけたことがうれしい」。

ニッポン放送開局60周年記念ラジオドラマ
「想像ラジオ」

想像の中だけで聞こえるラジオのパーソナリティが主人公という、複雑で、音声化は難しいと言われた作品にあえて挑戦した（ニッポン放送、エル・ファクトリー）。制作と演出を担当した宗岡芳樹さんは、「西田さんは原作も台本も読みこんできてくれて、5時間ぐらいの収録があっという間だった」。

●ラジオ部門・DJパーソナリティ賞

西向幸三（エフエム沖縄）

パーソナリティを務める「ゴールデンアワー」では、番組登録をしているリスナーが1万人を超える。「ポッドキャスト、ドコデモFM、LISMO WAVEで、沖縄だけではなく全国の方に聞いていただいている。ラジオは音声メディアなので、音でいろいろなものを想像して新しいものを作り上げていく。モノだけではなく、人の痛み、悲しみにも想像を働かせて、ともに寄り添っていけたらと思っている」。

●テレビ部門・マイベストTV賞

24時間テレビ ドラマスペシャル「今日の日はさようなら」

視聴者の投票によって選ばれるマイベストTV賞グランプリは、「今日の日はさようなら」（日本テレビ放送網）に決まった。がんに侵された青年を主人公に、家族の大切さ、命の尊さが描かれた。視聴者からは、「大野智の細やかな演技が光る」「見終わったあとの清々しさが心地よい」などの声が寄せられた。

河野英裕プロデューサーは、ドラマ「妖怪人間ベム」（2011年度）に続く2回目のグランプリ。「生きることをテーマにしたいと思った。見ていただいた方に感謝」と語った。

視聴者を代表し、東京在住の菊地美奈子さんが河野さんに賞状とトロフィを贈った。「視聴者も参加できるようなドラマが見たい」と、制作者にリクエスト。

●テレビ部門・個人賞

三浦春馬

最も輝いた人に贈られる個人賞には三浦春馬さんが選ばれた。「僕のいた時間」では自ら企画を提案し、難病と闘う主人公を好演。「ラスト・シンデレラ」では年上の女性を翻弄する青年を演じた。代理で受賞したフジテレビの中野利幸プロデューサーは、「まじめで誠実なイメージを打ち破ったところに成功の秘訣があったのでは」と語った。本人は映画撮影のため欠席。

●テレビ部門・特別賞

戦後史証言プロジェクト
「日本人は何をめざしてきたのか」第1回～第8回

「戦後70年」を前に、沖縄の普天間基地、福島第一原発のある福島県の浜通りなど、戦後の繁栄から取り残された地を訪ね、人々の証言を通して、地方の視点から戦後史を捉え直す試みは、テレビジャーナリズムとして秀逸。自立を願いながらも中央の政策に翻弄される姿を記録し、多くの人が見られるようネットにアーカイブスを立ち上げ、放送しなかった部分も含めて無料公開している。

NHKの大型企画開発センターの塩田純エグゼクティブ・プロデューサーは、「戦争の時代、敗戦後のことを知っている人がどんどん亡くなっていく。一刻も早く記録しておきたい」。

「証言は戦後史のなかの分岐点を体験した非常に貴重なもの。未来に残し、みなさんに聞いていただきたい」と、大型企画開発センターの太田宏一チーフ・プロデューサーは語った。

「地方でしか放送されなかった映像に価値あるものがあるのではと取材陣が探して、そのいくつかが番組の中で生かされた」と語る文化福祉番組部の東野真チーフ・プロデューサー。

CM部門

●CM部門・大賞

サントリーホールディングス
ペプシNEX ZERO 桃太郎

激戦の末、大賞に輝いたのは、「ペプシNEX ZERO 桃太郎『Episode. ZERO篇』」。ハリウッド映画を思わせる、スケールの大きな映像で昔話を現代によみがえらせた。サントリー食品インターナショナル食品事業本部の三好健二宣伝部長は、バードマンを客席に掲げて見せ、「自分より強いヤツを倒せというメッセージを伝えたかった。商品のスペックを語るより、情緒一本で勝負した」と語った。

●CM部門・優秀賞

全国都道府県及び全指定都市「LOTO7　シリーズ」

宝くじ「LOTO7」を買ったことを認めない上司を柳葉敏郎、その部下を妻夫木聡が演じる、ユーモアたっぷりのドラマ仕立てのCM。全国自治宝くじ事務協議会事務局の稲垣敦子次長は、「放映当初から非常に楽しんでいただいて、反響があった」と笑顔を見せた。

リクルートホールディングス「すべての人生がすばらしい」

人生をマラソンにたとえ、コースをはずれたランナーの多様な生き方を応援するCM。「道は一つじゃない、ゴールは一つじゃない。それは人間の数だけあるんだ」という言葉が印象的。マラソンシーンは「1500人に集まってもらって撮った」とリクルートホールディングスの宮内純枝ゼネラルマネージャー。

報道活動部門

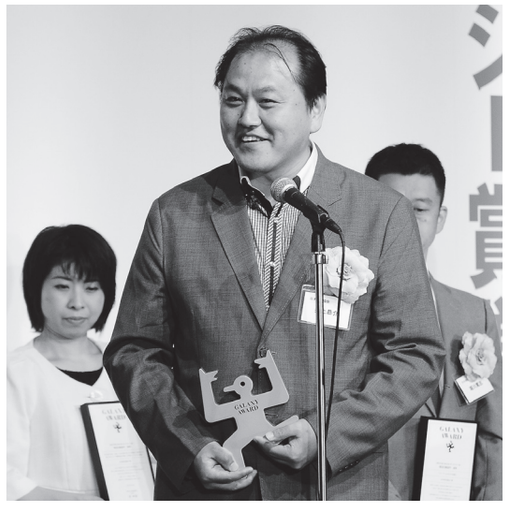
「空白の68年～日朝両国に眠る遺骨～」一連の報道活動

戦中戦後に北朝鮮と日本で亡くなり、それぞれ祖国に帰れないままになっている遺骨についての報道活動。朝日放送報道局ニュース情報センターの南出拓平記者は、「いろいろな制限があるなかで、北朝鮮の遺族の方が想いを語ってくれた。それがみなさんに伝わったのかなと思っている」と語った。

こうのとりのゆりかご（赤ちゃんポスト）報道
～実態ふまえ“放送エリアと視聴者層”拡大への取り組み～

2007年に熊本市の病院に開設された赤ちゃんポストのその後を丹念に取材し、ニュース、ドラマ、ラジオで発信した。「取材対象者との信頼関係を築き、多くの証言をいただくことによって、熊本だけの問題ではないことを、ドラマを通じて全国に発信できたことがうれしい」と熊本放送報道制作局の筬島一也局長。

●報道活動部門・大賞



「里山資本主義」地方、日本の新たな生き方を提案し「解決策」を提示するシリーズ番組放送と出版、全国的ムーブメントの創出

地域の現実と人々に正面から取り組み、出版やネット配信など手法面での多角展開も見られた報道活動。「里山資本主義」はマネー資本主義とは異なる新しい価値観を提示。NHK広島放送局の井上恭介チーフ・プロデューサーは「過疎地、高齢化が進んでいる所が実は元気だったり、新しい事をやっている人がいて、僕たち自身も励まされてここまできた」。

志賀信夫賞

●受賞者・石井ふく子

放送界に貢献した人を讃える志賀信夫賞は、プロデューサー歴55年の石井ふく子さんに贈られた。グレーを基調にしたシックな装いで現れた石井さんは、「いろいろな方との出会いが私の仕事の支えになっている」と挨拶し、今後も家族をテーマにドラマを作っていきたいと抱負を語った。

ステージには花束を抱えた水前寺清子さんと中田喜子さんも登場。華やかに石井さんを祝福した。石井さんが水前寺さんに会える場所を考えて、スタジオのトイレで初めての出演交渉をしたエピソードを披露すると、会場は笑いに包まれた。最後はひときわ大きな拍手が石井さんに贈られた。

「先生から、リハーサルを大切に、収録時の流れを大切にという言葉を頂戴し、それから20年間、みなさんでドラマ作りをしてきた」と中田喜子さん。

水前寺清子さんは石井さんに声をかけられ、「ありがとう」で初めてドラマに出演した。「先生のおかげで歌とドラマの道を開いていただいた」と感謝の言葉を贈った。

●懇親会●

民放連専務理事
木村信哉さん

ATP理事長
倉内均さん

ラジオ部門審査委員長（中央）と大賞受賞者

贈賞式司会のやまだひさしさんと受賞者の毬谷友子さん

NHK専務理事
板野裕爾さん